

森詠

オサムの朝

あした



森詠

オサムの朝

あ
し
た



オサムの朝^{あした}

一九九四年三月二五日 第一刷発行
一九九五年二月二〇日 第二刷発行

著者 森^{もり} 詠^{えい}

発行者 若菜正
発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
郵便番号 一〇一―五〇

編集部 (〇三)三二三〇―六一〇〇
販売部 (〇三)三二三〇―六三九三
制作部 (〇三)三二三〇―六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

オ
サ
ム
の
朝^{あした}
目
次

軍 ^{シヤ}	引越 ^シ	雷	れんげ	氷 ^ひ	雄 ^{おん}
鶏 ^モ		雨	草	室 ^{むろ}	鶏 ^{どり}

105	86	67	47	27	7
-----	----	----	----	----	---

離婚

224

赤トンボ

203

オニユリ

183

夕焼け

164

勉の家出

145

土蜂つちばち

125

装画 渡邊良重

装丁 山村行輝

オ
サ
ム
の
朝^{あした}

雄おんどり鶏

修は背中躍るランドセルを片手で押えながら畦道を懸命に走った。ランドセルの中の鉛筆箱がかたこととくぐもった音をたてていた。麦の畑を過よって走る線路に目をやった。

銀色の日射しが青々とした麦畑一面に降り注いでいた。南からの柔らかな風がまだ穂のない麦の葉を揺らし、眩い波紋を作って拡っていく。

「まだ来ねえ」

修は左手の雑木林を窺った。線路はその雑木林のところで、ゆるく右にカーブして坂を下り、こんもりと茂った鎮守の森に消えている。機関車はまだ駅を出ていない、と修は思った。

「おーい、オサムう。待っててくれよう」

だいぶ後ろの方からテツオの甲高い叫び声が聞えた。修は振り返らず走り続けた。細い畦道はどこどころ泥でぬかっけていて柔らかく、足をとられそうだった。ズック靴はすっかり泥にまみれていた。しっぱねがズボンの尻の部分にまで上っていた。

畦道が終り、ようやく線路の土手に出た。修は息を切らせながら、左手の森を見た。機関車の姿は見えなかった。

修はランドセルを下し、線路脇の草地に放り出した。テツオが畦道をころがるように走って来

る。

修はレールに屈みこみ、膝をついて片方の耳を押しあてた。鉄錆の臭いが鼻孔を刺戟した。ひんやりとした感触が頬にあたった。耳を澄した。かすかに透き通った響きの、鼓動のような音が聞えた。

砂利に足を滑らせ、ころびそうになりながらテツオが走りこんだ。テツオは修の傍に腹這いになり、レールに耳をあてた。テツオは修と顔を見合せた。

「聞えっけ？」

「来るぞ」

修は頭をもたげ、鎮守の森の方角に目をやった。線路がくねくねと曲り、陽炎かげろふの中にゆらめいていた。

「駅を発車したんだ」

「ほんとだあ」

テツオはレールに耳を押しつけたまま、目をくりくりと動かした。修はもう一度、レールに耳をつけた。前よりも線路を伝わってくる音がはっきり聞える。

「持って来たか」

「持ってねえんだ。忘れてきた」

「チッ。ぼくの半分分けてやるよ」

「悪かんべ、そんじゃ」

「いいよ」

修は上衣のポケットを探り、数本の釘を取り出した。大工箱から盗んできた釘だった。テツオの掌と自分の掌に釘をかわるがわる数えながら置いた。テツオは上衣の袖で鼻をすすった。袖口はこびりついた鼻汁の跡で、てかてかになっていた。

「ごじゃっぺ（インチキとか嘘の意味）じゃなかんべ？」

「ごじゃっぺじゃないよ。勉兄ちゃん（つとむにい）が教えてくれたんだ。東京じゃ、電車に釘をひかせるんだって。そうすつと釘が磁石になるんだ」

「オサム（おさむ）の兄ちゃん（あにちゃん）がいうんなら、ごじゃっぺじゃなかんべ」

テツオは納得した面持ちでうなずいた。

兄の勉は修より五歳年上で、同じO町の小学校の六年生だった。勉たちは都会からの転校生ということで、なにかにつけいじめられていた。それでも、勉は都会のことについてよく知っていたので、みんなから一目置かれていたのだ。

修たちがO町に引越して来たのは三年前のことだった。東京の家が戦災で焼け出されたため、O町に住む母親の姉夫婦を頼って越して来たのだ。もつとも修がまだ四歳の頃のこと、修には東京での生活の記憶はまったくいいほどなかった。

O町は栃木県北、那須高原のはずれに位置するひなびた旧城下町だった。かつては旧白河街道の道筋にあたる宿場町として栄えていた。ところが、江戸末期、O藩は会津藩や東北列藩と歩調を合せて、薩長の官軍に非協力的であったため、明治新政府はその報復として国有鉄道を敷く際に、旧街道筋のO町から四、五キロ西にはずれた隣りのN町を通したのだ。そのためO町は過疎の町になり、一方の東北線の駅を持つN町は、塩原温泉の玄関町ということもあって飛躍的に発

展していた。

N町からO町を通り、さらに田舎のK町を結ぶ私鉄の東野鉄道^{とうや}が敷かれたのは明治も終る頃だった。O町から外に出るためには、東野鉄道でN町に行き、東北線に乗り換えねばならなかった。修はこの東野鉄道が大好きだった。東野鉄道は単線で、一日の本数も数える程しかなかった。修には広々とした麦畑や田圃の中を、唸りをあげて突っ走る気動車や蒸気機関車は憧れの乗り物だった。修はまだ東野鉄道に二、三度しか乗ったことがなかった。だから、早く大人になりたいかった。大人になれば毎日、東野鉄道に乗ってどこかに出かけられるからだ。

「おい、やっぱ、蒸気機関車だ」

森の高い梢越しに黒い煙が立ち昇るのが見えた。修は手に持った釘をレールの上に急いで並べはじめた。テツオも一緒に釘を並べだした。

「オサム、なんで釘が電車にひかれると磁石になんだんべ？」

「知んね。兄ちゃんが知ってつかも知んね」

「蒸気機関車じゃ、だめじゃなかんべか」

「なんで？」

「なんでって、電車ってのは電気で走っぺ。だから、磁石になんだんべ？」

「分んね。まずやってみっぺよ。機関車にひかせてみれば、分っぺ」

修はそういいながら鎮守の森の方を見た。機関車の黒い車体が森の陰から現われた。長い煙突から間断なく、もくもくと黒い煙が吹き上げられていた。

蒸気機関車といっても東野鉄道のそれはかなりの旧式で、D51やC58といったスマートな蒸気

機関車とはおよそ縁遠いシロモノだった。明治初期に日本ではじめて新橋・横浜間を「陸蒸氣」と呼ばれる蒸氣機関車が走ったが、その面影を残したオモチャのような機関車である。煙突は異様に長く、排煙口にはスス取りの金網が張ってあった。駆動輪は二輪しかなく、燃料は石炭でなく木材だった。引いている車輛も通常、客車が二輛に貨車二輛程度で、馬力が少ないためにそれ以上の車輛を引っぱって走れそうになかった。

少しでも坂に差しかかると、蒸氣機関車はあえぎだし、一生懸命、黒い煙や白い蒸氣を吐きながら走った。その音が、修には「なんだ坂、こんな坂」という掛け声に聞えるのだった。そんな時、汽車の速度は大人が歩くぐらいにまで落ち、修たち子供が走っても容易に追いつけた。

修とテツオは釘をレールに並べ終ると、麦畑に下りて待った。蒸氣機関車は姿を現わしてから、なかなか近付いて来なかった。

修はテツオと一緒に草地に坐り、うっとりとして蒸氣機関車が走って来る様子を眺めていた。近付いて来ると、修たちは蒸氣機関車の音に合わせて、「なんだ坂、こんな坂」「なんだ坂、こんな坂」と大声で囃したてた。

蒸氣機関車は轟音を残して、修たちの前をゆっくりと走り過ぎた。修とテツオはすぐさま線路に駆け上った。

「あれまあ、ぺっしゃんこになってらあ」

テツオは真っ平らになった釘を手にとった。修も自分の分の釘を急いでかき集めた。テツオは平らになった釘を互いに近づけたり離したりした。

「どうだっぺ？」

「——やっぱ、だめだ」

修は首を傾げた。掌の上の釘は互いに近づけても、ぴくりとも動かなかつた。修は頭を掻いた。テツオが慰め顔で、

「こんど、気動車でやってみっぺ」といった。

「うん。そうすっか」

「そんなら、このまま釘を置いてみっぺ。明日までには気動車が何回もひいてぐっぺからよ」

修はテツオの提案に一も二もなく賛成した。二人はまた競うように潰れた釘をレールの上に並べた。

二人は並べ終わると、どちらともなく「家まで競走だ」と叫び、畦道に駆けこんだ。修は放り出しておいたランドセルを拾う分だけ遅れて、テツオの後を追った。

畦道から家の前を通る農道に出てからも、修はテツオに追いつけなかつた。

テツオは修の家の前まで来ると、立ち止った。修はようやくテツオの場所に走り寄った。二人は肩で息をしながら、笑い合つた。

「また明日、遊んべ」

「うん。また明日」

修はテツオと手を振って別れ、家に通じる小道に走りこんだ。庭先で餌をついばんでいた鶏たちが、コココツと鳴きながら道をあけた。

「ただいま、タロー」

雌鶏たちを従えるようにして花壇の土を足で掘り返していた白レグホンの鶏に叫んだ。タローは飼っている鶏たちの中で一番体格のいい雄鶏だった。

タローは赤いトサカをびくっと動かし、修を見つけると、羽をばたかせながら花壇から飛び出した。

「やめろ、タロー。後で遊んでやるから」

修は両手で頭を抱え、玄関に駆けつけた。タローは羽を大きく広げ、修の背中に飛びついた。

「痛っ、痛いってば。よせ、タロー」

タローは修のランドセルの上に乗る、修の頭をくちばしで突つついた。

「やめろってば、このやろう」

手を振り、タローを追いかつた。タローは勝ち誇ったようにコーッコーッと叫びながら、羽をひろげて庭先に飛び降りた。抜けた羽毛が宙に舞い上った。今度は修がタローを追いかけた。タローは羽をばたつかせて逃げ回った。途中で身を翻して、玄関の引き戸を開け、家の中に駆けこみ勢いよく戸を閉めた。

「ただいまーッ」

上り^{がま}櫃にランドセルを放り出した。靴を脱ごうとして躰を硬直させた。玄関の土間に古びた兵隊靴がそろえてあった。薄暗い六畳間に見知らぬ男の瘦せこけた背中が見えた。男は正座したまま、修の方を振り向いた。

修は男の顔を見て馬だと思った。男の顔は異様に細長く、不自然に目が大きく目蓋が脹れ上っていた。まるで泣いているように口元を歪めている。だが、よく見ると男の口には歯並びのいい

齒が覗いており、それで男は笑っているのだと分った。

男と向き合う恰好で、父の行雄があぐらをかいて坐っていた。父はちらりと修に目をやったが何もいわず煙草を喫っていた。

「お帰り、オサム。遅かったね」

母の声がして、台所から手拭いを姉さんかぶりにした母の姿が現われた。修は土間に突っ立ったまま母を見上げた。母は手拭いを頭からはずし、しきりに目を拭った。目が赤く潤んでいた。そんな母を見るのが初めてだった。

「さ、オサム、挨拶おし。弥太郎おじさんが無事に帰ってらしたんだよ。シベリアからね」

「シベリア？」

「そう。シベリアって、寒くて遠くて、食物もない酷い所だったそうだよ」

修はまじまじと馬面の男を眺めた。シベリアがどこかは知らなかったが、母の口ぶりから察してともかく大変な所なのだろうと思った。修はちょこんと頭を下げた。

「姉さん、この子がオサム君かい」

「ええ。そうですよ。弥太郎さんが出征している間に生まれた子でね。きかん坊で元気がよすぎて困ってるんですよ」

弥太郎おじさんは口を開けたまま、「あーあー」と何度もうなずいた。弥太郎おじさんは身によじって後ろを向いているのがつらくなったのか、大儀そうに畳に片手をついた。よれよれになった長袖のシャツがめくれ、骨に皮がこびりついたような痩せ細った腕があらわになった。

骸骨の腕みたいだと修は身震いした。学校の理科室に立っている骸骨を思い浮べたのだった。